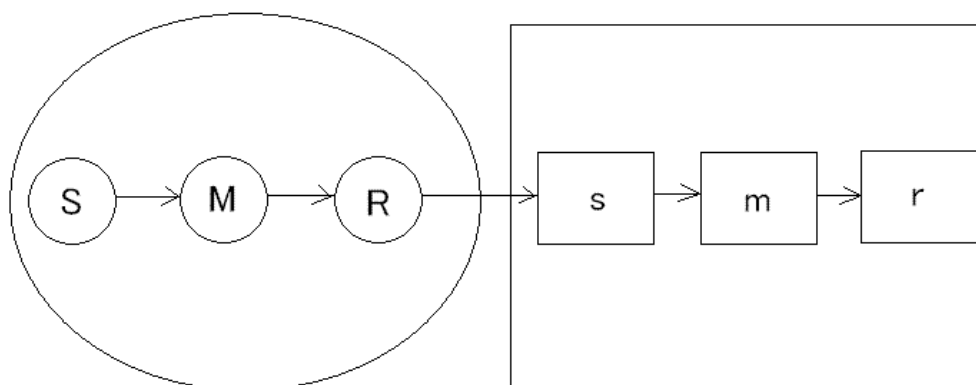


翻訳論の著作は多数存在するが、その多くは、特定の言語から特定の言語への翻訳の技術を扱った著作であり、あらゆる翻訳に共通する普遍的な問題を理論的に扱う著作は少ない。翻訳の純理論的問題を扱った先駆的な業績としては、ユージン・A・ナイダの翻訳論（ナイダ, 1972, 1973）がよく引き合いに出される。しかしナイダには哲学的視点が乏しいので、1章では、ナイダの著作に加えて、ジョルジュ・ムーナンの著作『翻訳の理論』（ムーナン, 1980）を足がかりにして、翻訳の可能性をめぐる議論を概観したい。また2章では、クワインが『言葉と対象』（クワイン, 1984）で提起した、翻訳の不確定性のテーゼについて論じることにする。

1. 厳密な翻訳は存在するのか？

1.1. 翻訳とは何をする事なのか？

ナイダは、「翻訳とは原文の内容を別の言語によって再現することである」と言う（ナイダ, 1973, p.15）。このことを説明するために、彼は、次のような図を書いている。



（ナイダ, 1972 の図を一部改変して掲載）

大きな円と大きな四角は、それぞれ言語を表していると考えてほしい。例えば丸は英語で、四角は日本語としよう。大きな円の中には、SとMとRがあるが、Sは「Source」の略で発言者・著者を、Mは「Message」の略でSがなした発言や著作を、Rは「Receptor」の略で、聞き手・読み手をそれぞれ意味している。大きな四角の中のsとmとrも同様である。例えば、英語という1つの言語の中に留まる言語活動では、全てが大きな円の中で完結する。つまり英語の話者が、英語のメッセージを発し、英語を習得している聞き手がそ

れを受け取る、というように。一方翻訳というのは、2つの言語をまたぐ言語活動であり、**翻訳者は英語の読者としての R の位置と、日本語の著者としての s の位置を兼任することになる**のである。ここで、翻訳者は次の点に気を遣わなければならない。それは、**訳書 m が訳語の読者 r に対する関係が、原著 M が原語の読者 R に対して持つ関係となるべく同じになるようにする、**という点である。つまり、 **$m : r = M : R$** となるような m が理想の翻訳なのである。

上述のような等価性を達成するには、**形式的等価性 (formal equivalence)** よりも、**動的等価性 (dynamic equivalence)** を重視するべきだ、とナイダは言う。形式的等価性を重視する翻訳というのは、いわゆる逐語訳のことであり、原語の単語一つ一つを、辞書で対応している訳語に置き換えていく訳のことである。それに対して、動的等価性を重視する翻訳とは、語と語の一対一対応よりも、原文の情報内容を汲み取り、それを訳語で再現するような翻訳であり、これが達成されたときには、**M を受容したときの R の反応 (response)** と、**m を受容したときの r の反応は一致する**という。

動的等価性を重視する翻訳では、翻訳される文章 (**text**) だけではなく、それを取り巻く**脈絡 (context)** を視野に入れて翻訳がなされる。脈絡の中には、言語的脈絡と文化的脈絡がある。文化的脈絡を考慮に入れることの重要性は、例えば離婚が頻繁に起こる文化で書かれた離婚についての文章を、離婚が許されない文化の言語に翻訳する場合などには顕著である。また、例えば蛇は西洋では狡猾な生き物と考えられているが、エジプトでは神聖な生き物とされている。このような位置づけの違いも、文化的脈絡の違いとして、動的等価性を重視した翻訳では、考慮に入れられなければならない。

言語的脈絡には、統語上の脈絡と、連語上の脈絡がある。統語上の脈絡というのは、例えば同じ「はなし」でも、「はなしがある。」というときの「はなし」は名詞であり、「はなしましょう。」というときの「はなし」は動詞だということが分かるように、前後の語との関係による統語的な制約のことである。連語上の文脈というのは、例えば同じ「学校」でも、「今日は学校が無いんだ。」というときの「学校」は授業の意味であり、「学校の改築が行われている。」というときの「学校」は校舎の意味であるというように、前後の語や文との関係による意味的な制約のことである。

辞書を引くと分かるように、ある単語に当てられる訳語は複数あるのが普通であり、文化的脈絡や言語的脈絡は、それらの訳語から適切なものを選び出す際に必要となる。それだけではない。文化的脈絡や言語的脈絡を顧慮すると、原文とは形式的に大きく異なった訳をしなければならない、ということも動的等価性を重視する翻訳では生じてくるであろう。形式的等価性を重視する翻訳と、動的等価性を重視する翻訳は、**訳出の単位**が異なっている。形式的等価性を重視する翻訳というのは、原語と訳語を一対一対応させる逐語訳であるから、訳出の単位は単語ということになる。一方、動的等価性を重視する翻訳は、言語的脈絡を重視するから、訳出の単位は、単語のレベルよりも大きくなるであろう。

「動的等価性」というのは、ほぼ「内容の等価性」と言い換えてよい (邦訳では、‘dynamic

equivalence' を「内容重視の対応」と訳している)。するとナイダは、**形式と内容**という、古典的な二分法に則って議論をし、翻訳においては、形式の保存よりも内容の保存を重視すべきだと言っている事になる。次節でも再度論じるが、ナイダは、内容保存的な翻訳の可能性に関しては、きわめて楽観的である。ただし、形式が本質的な役割を果たす詩の翻訳には、限界があることも指摘している。「ある言語でいえることは、すべて他の言語でも表現することができる。ただし、表現形式をどうしても訳出しなければならない場合は別である」(ナイダ, 1973, p.7) とナイダは言う。表現形式を訳すことの限界は、例えば俳句や短歌を外国語に訳そうとする場合に痛感されるものであろう。

ナイダが理想とする翻訳は $M : R = m : r$ を満たす翻訳である。 M は R にとって訳書ではない以上、 m も r に訳書だという印象を与えないのが望ましいであろう。だが、彼は逆に、原著が描く世界が、訳書の読者の世界からは遠い世界である、ということを感じさせるのはかならずしも悪くない、とも言っている。例えば源氏物語を現代の日本語に訳す場合に、「平安時代の「やんごとなき」宮廷人たちの生活を、現代の東京で起こったことのように置きかえる」(ナイダ, 1973, p.16) のは望ましくないだろう。また、聖書が書かれた時代には悪魔の仕業と考えられていた症状は、現代的に言えば精神病であったということが知られているからといって、“demon possessed” を「心を病んで」と翻訳するのは誤りであろう (p.16)。最初の主張と矛盾するようではあるが、翻訳書独自のよさというのは、読者が、日常の世界から遠く離れた世界の雰囲気や堪能できる所にあるのだ。エキゾチックな雰囲気を残すためには、形式的等価性をある程度保存し、訳書の読者が違和感を持つような表現を残しておくのが、むしろ望ましいのである。

1.2. 外示と共示

クワイン以前に交わされてきた翻訳をめぐる哲学的議論は、つねに「そもそも厳密な翻訳は可能なのか」という主題に集中していた。日々翻訳活動を実践し、翻訳の可能性を身をもって実証しているように見える翻訳家は、同時に、翻訳の不可能性を最も強く実感している者でもある。それでも翻訳家は、(それがどういう意味であれ) 大雑把な翻訳の可能性については疑ってこなかったようである。翻訳の可能性の問題は、(それがどういう意味であれ) 厳密な翻訳 (exact translation) の可能性の問題である。

翻訳の実践現場から提起される厳密な翻訳の不可能性の議論は、常に具体的な事例を伴っている。内容と形式という先の対立をもう一度持ち出すと、形式を翻訳することの困難さ、あるいは不可能性は、誰もが認めるところであろう。「古池や蛙飛び込む水の音」を、その価値を失うことなしに英訳することは不可能だし、一編のソネットを、それが言語において持っている価値を余すところなく和訳することは不可能である。また、音や綴りの類似性を利用した掛詞や駄洒落も、厳密に翻訳することは不可能であろう。

しかし、ここでは別の所に起源を持つ翻訳の困難性に着目したい。翻訳の実践として最も長い歴史を持つものの一つには聖書翻訳があるが、例えば「種まく人」のたとえ話を、

農業を知らない遊牧民族の言語に翻訳することが可能だろうか？あるいは、海を知らない山岳民族の言語に『白鯨』を翻訳することはできるだろうか。千羽鶴が日本人に対して持つ意味を、英語に込めることができるだろうか、という疑問がしばしば提起される。これらは原語の等価物が訳語に存在しない場合といえるだろう。

これらのケースは、日本人が外来語をカタカナ言葉として導入するように、訳語に新しい語を導入したり、「海」は「塩辛い大きな湖」などと、言い換えてから訳すようにしたりすれば、大方の問題は回避できるように見える。しかし、これらの方策によって翻訳できるのは、言葉の**外示 (denotation)** だけであって、その**共示 (connotation)** は翻訳によって失われてしまうのではないか、という反論がある。外示とは、言葉によって指示されているもの、概念における外延のようなものと思っておけばよい。一方共示とは、言葉が母国語話者に対して持つ含意やニュアンス、言葉から連想されるもの、喚起される情動などのことである。種まきを見たことの無い遊牧民族に、種まきが、農耕民族に対して持つ共示を伝えることは容易ではない。

より問題が込み入ってくるのは、訳語においても外示が一致する表現はあるが、その共示が、原語の表現と訳語の表現で異なっている場合である。日本では火葬が一般的であるが、イスラム教の国では、火葬が禁忌とされる国もある。「火葬」という語の共示は、そのような国の言語において、「火葬」という日本語と同じ外示を持つ言葉の共示とは、大きく異なっているだろう。

ある表現の共示的な意味が形作られるのは、その表現が、特定の社会的立場にある話し手によって用いられることが多かったり、特定の状況で用いられることが多かったり、別の特定の表現とともに使われることが多かったりするからである。つまり、**表現は、それと共起することの多い要素を連想させ、特定の感情を引き起こす**のである。例えば、日本語の「人民」という言葉は、特定の主義を擁する話者を強く連想させるが、これを‘people’と訳してしまうと、そのような共示が損なわれてしまう。

外示も共示も一致するような表現がたまたま存在する場合以外は、厳密な翻訳は不可能になってしまわないだろうか。これに対する反論は2つあって、1つは、それぞれの表現に注をつければ、原文の表現にどのような共示があるかを説明できるのだから、共示も含めて厳密な翻訳が可能であるというものである。もう1つは、厳密な翻訳において重要なのは外示であり、共示がうまく訳出できなかつたとしても、厳密な翻訳でなくなってしまうわけではない、とするものである。2つの意見は互いに排除しあうものではないが、実際には後者の主張をする者が多い。2章で取り上げるクワインもその一人であるが、他にも、意味の研究において行動主義の原理を導入したL・ブルームフィールドは、ナイダと同じように共示を外示から、C. K. オグデンとI. A. リチャーズは情動的意味を指示的意味から、ポロックは喚起的意味を指示的意味から、フェーグルは非認知的意味を情動的意味から、スティーブソン力学的意味を認知的意味から区別し、前者の存在を認めるとともに、前者を、後者に付加される非中心的な要素として扱っているのである(ムーナン, 1980,

p. 158)。

翻訳にとって重要なのは、認知的、指示的、外示的な意味だけであるという考え方の問題点は、2章の最後で再度取り上げることにしよう。ここでは話を認知的、指示的、外示的な意味に限り、さらに詩や掛詞など、言葉の形式が重要性を持つ文の翻訳を除いた場合には、いかにして厳密な翻訳が可能（あるいは不可能）であるとされたのか、その議論を見ていくことにしたい。

1.3. 意味のATOM

言語に対する理解が素朴であった頃は、翻訳というのは、原語を訳語に置換し、順番を並べ替えるだけという機械的な作業であるように思われていた。もちろん実際に翻訳の作業に当たっていた人がしていたことは、そのような機械的な作業ではなかっただろう。しかし、翻訳の可能性に関する疑義が言語化されることはなかった。なぜなら、宇宙の構造や人間精神は、言語とは独立に、客観的に定まっておき、言語はそれら普遍的な意味にラベルを貼っているだけであると考えられていたからである。普遍的な意味が存在し、語はそれを名指すだけであり、文法は語の並びを規定するだけであるなら、翻訳というのは「リットル単位の容量を、ガロン単位で表すこと」（ムーナン、p.50）と何ら違いがないように思われたのである。「これはペンです。」を英訳するとき、「これ」を‘this’に、「は～です」を‘is’に、「ペン」を‘a pen’に置き換え、順番を入れ替えて“**This is a pen.**”という文を作る私たちは、このことを疑う必要性に迫られてはいないように見える。

だが、「弟」という日本語に一語で対応する英語が存在しないこと、‘snipe’（くちばしの細い鳥）という英語に一語で対応する日本語が存在しないことを知ると、一対一対応の翻訳の可能性は、むしろ例外的だということが見えてくる。先の「これはペンです。」の場合でさえ、日本語では「ペン」と1語であったものが、英語では‘a pen’というように2語に、日本語では「は～です」と2語であったものが、英語では‘is’1語で担われているのである。同様のことは、ほとんど全ての語にわたって言えるだろう。有名なものとしては、「湯」を1語で表す英語は存在せず‘hot water’としなければならないことや、日本語では「あぶら」と一纏めにして区別しないものを、中国語では「油」と「脂」とに区別するということがある。このような対応関係のズレは、目に見えるものばかりとは限らない。例えば中国語の「黄」は、黄土色なども含む、日本語の「黄色」よりも広い概念である。このことは中国語と日本語が同じ文字を使っているだけに、見落とされやすいものである。

そこで、厳密な翻訳の可能性を主張しようとする者は、ソシュールの説を受け入れて、各々の言語は、世界の**分節化**の仕方が違うのだと主張することになる。ソシュールの説が厳密な翻訳の可能性を排除しないためには、2つの点が要請されなければならない。第1に、言語が分節化するのには、言語とは独立に存在する客観的な世界であり、私たちはその客観的な世界を共有しているという点、第2に、全ての言語に共通するような**意味のATOM**が存在して、その意味のATOMを組み合わせれば、あらゆる言語のあらゆる意味を再現

できるという点である。第1の要請はあとで批判する。第2の要請は、分節化の境界が異なる言語体系の間で、ある原語の意味する範囲を、有限の長さの訳語を組み合わせで再現することができる可能性に関連しているように思われる。意味の原子が存在しないとすると、ちょうど無理数は整数の比では近似的にしか表せないように、有限な長さの訳語の組み合わせは、近似的にしか原語の分節化を再現できなくなるように思われるのである。

意味の原子が存在すれば、原文を分析し訳文へと統合する翻訳の過程は、化合物を分解し、得られた原子を別の仕方で結合させて、別の化合物を作る過程になぞらえることが正当化される。理想的な化学実験の過程では、原子の概念によって要請されるように、無から原子が生じたり、存在する原子が消滅したりすることはない。同様に、理想的な翻訳作業の過程では、原文に存在しなかった意味の原子が訳文に付加されたり、原文に含まれていた意味の原子が訳文では消滅していたりすることはないだろう。

意味の原子の探究を触発したのは、A. マルティネの二重分節の理論であった。かれは文の**最小連続有意単位**、すなわち形態素（形態素は語よりも下位の分節で、例えば語「はなす」は形態素「はな」と「す」の2つに分かれる）への分節化を第一分節、**最小連続非有意単位**、すなわち音素への分節化を第二分節と呼ぶ。例えば、形態素「はな」は音素「は」と音素「な」に分節化される。マルティネは、第一分節では形態素の開かれた有限な目録が、第二分節では音素の閉じた有限の目録が得られることを強調する。（ここで形態素の数が無限だというのは、実際に無限の数だけ存在しているということではなく、個数が定まっておらず、増加する可能性があるということを意味している。）人間の言語の際立った長所は、少数の有限個の音素を組み合わせで、数多くの形態素を区別し、それを組み合わせで無限の新しい文を作り出していくことができる点にあるわけである。

マルティネは、記号表現（＝シニフィアン）の分析によってこの知見に到達したのだが、マルティネにヒントを得て、記号内容（＝シニフィエ）においても二重分節が見出されるのではないかと考えたのが、L. イェルムスレウや、L. プリエトである。彼らの主張は、それぞれの音素が意味を担っており、形態素の意味は音素の意味の組み合わせであると主張するものではもちろんない。形態素の意味は、記号表現の音素への分節化とは別に、さらに細かい意味の単位へと分節化されるのではないか、というものである。これを表にすると次のようになる。

	第一分節	第二分節
記号表現	形態素	音素
記号内容	形態素の意味	意味の原子？

彼らによると、例えば形態素「弟」の意味は、「年下」と「男性」と「同胞」の3つの意味に分解され、「sister」の意味は、「女性」と「同胞」の2つの意味に分解されることにな

るだろう。ことになるだろう。またプリエトによると、フランス語の‘pouvoir’は「～できる」という精神的な可能性にも、「～する可能性がある」という物質的な可能性にも用いることができるが、ドイツ語の‘könen’は物質的な可能性にしか用いられない。すると、‘pouvoir’の意味には「可能性」の意味しか含まれていないのに対し、‘könen’の意味には「可能性」と「物質性」の2つの意味が含まれていることになるという。

このような意味の最小単位、すなわち意味のアトムをイエルクスレウは記号形成素 (figures) と呼ぶのだが、音素には対応していない意味のアトムを、あえて記号内容の第二分節だと考える利点は、意味のアトムが閉じた有限の目録を形成するというという主張を正当化できるように見えた点にあったと思われる。かくして、イエルクスレウやプリエトは、無限の多様性を有するかに見える各々の言語の意味が、有限種類の意味のアトムの組み合わせであらわされると考えるにいたったのである。この学説が真実なら、彼らは、言語学において、化学におけるドルトンやアボガドロの業績に匹敵する業績をあげたことになっただろう。

もっとも、概念を有限個の単純な概念の組合せで分析しようという試みは、イエルクスレウやプリエトの時代に始まったものではなく、ライプニッツによっても考案されたことは有名である。彼は、素数に単純な観念を対応させ、単純な観念を組合せて得られる観念 (単純な観念の集合の積集合にあたる) には、それら素数の積を対応させることを思いついている。例えば「理性的」= 2、「動物」= 3 とすると人間は理性的な動物と定義されるから、「人間」= 6 ということになる。このようにして、全ての観念にはある自然数が対応することになり、その自然数を素因数分解すれば、その観念がどのような単純な観念の組合せでできているかがわかるという仕掛けであった。

だが現実には、彼らの分析は、彼らが提示した例以外にはほとんど応用できないことが分かる。「麦」や「犬」や「時々」といった形態素の意味を、いったいどのようにしてこれ以上分解することができるだろうか？ある範囲の形態素の群に対して、実用本位のアドホックな分析はできるかもしれない。そのような局所的な分析なら、現代の意味論研究でも行われている。しかし、世界中の言語に含まれる形態素の意味を、有限個の意味のアトムの組みあわせで説明するというのは、絶望的な試みである。また、仮にそれができたとしても、酸素や水素が自然な化合物の構成要素の自然な単位であるようには、想定される意味のアトムは自然な単位にはなりえず、他の分析の仕方も可能であるような恣意的な分析になるだろう。

J. C. ガルダンが、意味のアトムの探究において果たした役割は、まさにこの自然な分析の断念というところにあった。彼の出発点は言語学以外のところにある。彼は考古学において発掘された資料を分類・整理する際に、発掘資料を、日常の言語ではなく、厳密に測定可能な諸特徴の組合せで分類することを思いついた。青銅器時代の道具は、道具の機能部分の形や、柄のつき方、寸法、正断面、側断面、輪郭、刃の形、付属物などの特徴の組合せで分類・整理し、これらの特徴から、考古学研究者が資料を検索できるようにした

のである。

ガルダンはこの成功を言語学にも応用することを試みた。彼の試みがプリエトやイエラムスレウに比して画期的だったのは、第一に、客観的で極めて微細な特徴を用いて意味を分解しようとした点であり、第二に、各々の形態素の意味を区別できる所までで満足し、意味のアトムへの、唯一の正しい分析を目指すことを断念した点にある。したがって彼の分析は、意味のアトムを単離する試みというよりは、概念を、弁別的な特徴の組合せによって他の概念から区別する試みだったといえよう。

ガルダンの試みも、成功には至っていないのだが、彼の試みに類するものは、分類法として、さまざまところで実用化されている。例えば、図書資料におけるデューイの十進法や国際十進法は、全ての資料を10進数で表される特徴の組合せで分類するものである。また、音声学（phonetics）における発音の分類は、現在国際音声記号の形で整理されており、有声音であるか無声音であるか、破裂音であるか摩擦音であるか鼻音であるか、唇音であるか舌頂音であるか舌背音であるかなど、音声の細かな特徴を組み合わせることで発音を表現することになっている。このような分類は、ガルダンの出発点となった、考古学資料の分類と同様の精神に基づくものである。

音声学が出たついでに、音声学と音韻論（phonemics）の違いについて言及しておこう。音声学があらゆる言語による、あらゆる発話に含まれる音を区別し記述を試みようとするのに対し、音韻論は日本語の音韻学、英語の音韻学というように原語の数だけ存在し、それぞれの言語体系において、意味を区別する働きを持つ最小単位である音素を研究するものである。したがって音声学は、間言語的に（interlinguistic）パロールに含まれる音を研究するのに対し、音韻論は、一言語内（intralinguistic）のラングに含まれる音を研究するものと特徴づけることができるだろう。

両者の違いは、音声の明確な違いが、言語によって違う音素として位置づけられたり、そうでなかったりするという例を挙げると分かりやすい。例えば、日本語では「p」の発音と「b」の発音の違いは、「甲板」と「看板」や、「旋盤」と「戦犯」の違いなど、意味の違いを担う違いであり、両者は異なる音素に属している。しかし韓国語では、「p」は語の頭に現れ、「b」は語の途中に現れるという違いはあるものの、「p」が「b」を入れ替えると違う形態素になってしまうような例はないから、異なる音素ではない。英語では、「rice」と「lice」のように、「l」と「r」を入れ替えることで違う形態素になる例があるから、「r」と「l」は違う音素に属しているが、日本語では、「r」で発音するところを「l」で発音してみても、意味が変わってしまうことはないので、両者は同じ音素に属していることになる。音声学は、あらゆる言語において別の音素として区別される音を記述し分けようとするため、詳細な記述法が用意されている。たしかに、個々の言語における発音を記述するだけならば、詳細な記述は不要であり、国際音声記号による発音の記載は、非本質的で無駄な部分が多くなってしまいうだろう。しかし、発音の客観的な特徴の微細な違いも逃さない分類の網目は、複数の言語における発音の比較を可能にしてく

れるのである。

音声学 (phonetics) と音素論 (phonemics) のこのような違いを念頭におき、K. L. パイクは、それぞれの語の語尾を取って、**エティック (etic)** と **イーミック (emic)** という2つの造語を提唱した。エティックとは、人類学などにおいて、音声学と同じように、客観的に観察可能な現象の差異だけに着目して、それを詳細に記述しようとする立場のことである。それに対しイーミックとは、現象の背後に隠された文化的コードに即し、文化体系の内部において、何が区別されているのかに着目する立場のことである。

ガルダンの試みは、言葉の意味を、イーミックではなく、エティックの観点から理解しようとする試みであったといえよう。そして、翻訳の可能性を論じるに際して、エティックへの着目は不可欠であるように思われる。なぜなら、冒頭に述べたように、翻訳とは2つの言語の間をまたぐ作業であり、原文のイーミックと訳文のイーミックを媒介するためには、エティックの **interlinguistic** な視点が必要だからである。客観的に観察可能なものに訴えて翻訳の可能性を論じる方向性は、クワインの議論の根底に存在するものなので、この問題は2章で再び取り上げることにする。

1.4. サピア=ウォーフの仮説

これまでは、ソシュールの分節化の理論を受け入れつつ、厳密な翻訳の可能性を残すための第2の要請について考えてきた。ここからは第1の要請、すなわち、私たちが言語の違いには関係なく、同じ客観的世界に住んでいるということについての議論に焦点を移すことにする。

新カント派に属し、W. V. フンボルトに影響を受けた、E. カッシーラーは次のように言っている。「人間は、言語という手段をもって [単に] 世界を理解し、考えているだけではない。人間の持つ世界観、この世界観の中での生き方が、すでに、言語によって決定されているのである」(ムーナン, 1980, p.53 の引用を孫引き) 言語は単に私たちの道具であるのではなく、私たちの世界観をも構成するのだ、という主張は、カッシーラーとは独立に、後に B. L. ウォーフによって再発見され、有名な「サピア=ウォーフの仮説」として日の目を見ることになる。ウォーフは、「言語は伝達とか反省の特定の問題を解くための偶然の手段に過ぎないと思ったりするのは、全くの幻想である。事實は「現実の世界」というものは、多くの程度にまで、その集団の言語習慣の上に無意識的に形作られている」という E. サピアの言葉を引き (服部, 2003, p.111 の引用を孫引き) ある人にとっての「現実の世界」が、言語習慣によって形作られる主張する。これは極論すれば、**話す言語が違えば、住む世界が違う**という主張に他ならない。

もし、この主張が正しいとしたら、どうなるだろうか。分節化の恣意性を受け入れても、それが同じパイを別の仕方で切り分けているだけの話ならば、厳密な翻訳の可能性は遮断されないように思われる。前節では、意味の原子が存在しないと、無理数を整数の比では表せないように、厳密な翻訳が成立しないと確かに論じたが、それは些細な批判である。

というのも、大きな整数の比にすればするほど無理数はより正確に近似できるように、意味の原子が存在しなくても、説明を長くして原文の意味をより厳密に再現する、という方向性は閉ざされていないからである。

ところが、切り分けるパイそれ自体が言語によって異なるのだとすると、翻訳の可能性を支持する論証は、その根元から折られてしまうことになる。住む世界が異なるという問題は、海を知らない山岳部族の言語に「白鯨」をどう翻訳するか、といった問題でも既に提起されていた。ただし前に提起したのは、文字通り住む場所が違うために、一方の文化に存在するものが他方の文化に存在しない場合にどうするか、という問題であった。これらの問題の中には地理、風土、植生の違いや、道具、制度、習慣の違いが翻訳を不可能にするのではないかという問題提起が含まれている。サピア＝ウォーフの仮説は、このような問題提起に、さらなる追い討ちをかけるものである。ウォーフ自身の主張には、彼の哲学的素養の貧弱さも手伝って混乱が見られるが、この仮説は、異なる言語を話す者は、たとえ同じ環境に居合わせたとしても、異なる部分に注目するために、異なる経験をしているということを含意しているのである。同じ木を前にしても、普段は街路樹しか見る機会がない都会人と、何百種類もの木に囲まれ、種々の木を細かく分類する言語を使いこなすブッシュマンでは、見ているもの自体が違うのではないだろうか。

ただし、サピア＝ウォーフの仮説の実例とされることの多い、「ホピ族にとっては、時間は存在しない」という主張は、マルティネによって強力に批判されている。ウォーフは、この主張の根拠として、ホピ族の言語の形式的な言語構造を引き合いに出すのだが、マルティネの反論は、ひとつの言語の中でも、まったく同じ意味を表すために、複数の言語構造を持った表現が使われることがある、ということに基づいている。例えば、「雨が降り続く」という文はフランス語では、“**Il pleut sans arret**”という表現でも、“**la pluie continue**”という表現でも表せる。フランス語を母国語とする話者にとって、両者の意味は全く同じである。しかしながら、前者の主語は‘il’ (=それ) であり、後者の主語は‘la pluie’ (=雨) である。主語が指すものの存在は前提とされる、という説を受け入れると、前者の表現は〈それ〉なるものの存在にコミットしており、後者は〈雨〉なるものの存在にコミットしていることになるだろう。ところがフランス人には、これらの表現を使い分けることによって、異なる存在論的コミットメント (クワイン) を表明しているという意識は全くないのである。

このことから得られる教訓は、表面的な言語構造の違いが、かならずしも世界観の違いに対応しているわけではない、という事実である。この事実を突きつけられたウォーフはしたがって、言語構造が違うから世界観も違うのだ、と直ちに結論することは許されなくなる。ホピ族の言語に時制が無いからといって、ホピ族には時間の観念が存在しないと必ずしもいえないのは、フランス語に“**Il pleut sans arret**”という表現があるからといって、フランス人が〈それ〉の存在にコミットしているとは必ずしもいえないのと同様である。

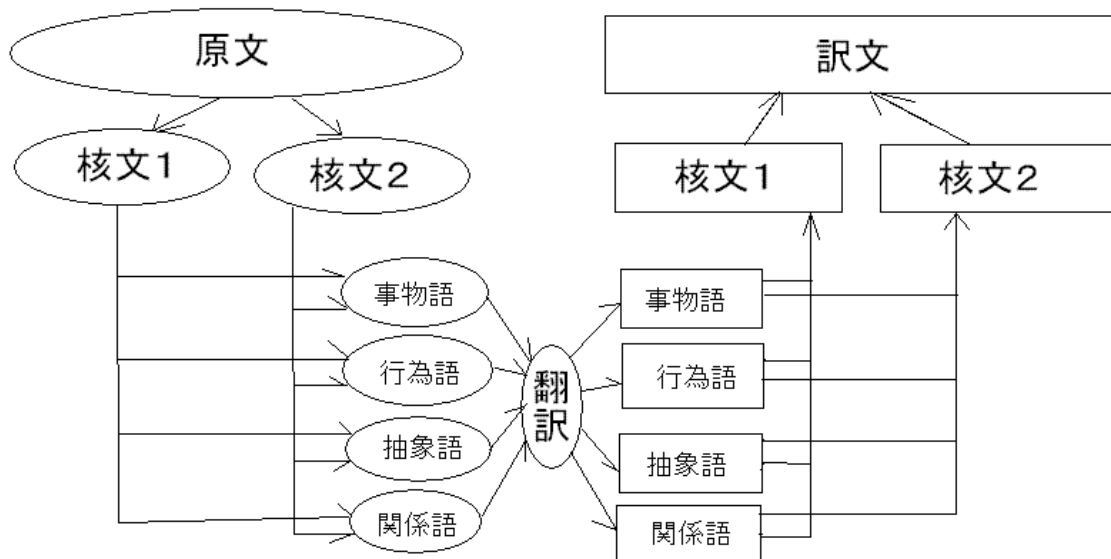
1.5. 普遍事象

厳密な翻訳の可能性を掘り崩す議論ばかりが続いたので、次は厳密な翻訳の可能性を支持する議論として、すべての言語に共通する普遍事象の探索の試みを取り上げよう。このような試みの中で最初に取り上げなければならないのは、チョムスキーの普遍文法である。チョムスキーは、**刺激の貧困 (poverty of stimulus)** にもかかわらず子供が言語を習得できるのは、人間には生得的に**普遍文法 (universal grammar)** が備わっているからだと考える。これが正しいとすると、人間の話す言語のすべては、普遍文法という同じ一つの幹から分化したものだということになり、全ての言語に共通する普遍事象も数多く見出されるはずである。勇ましくも見えるこの主張は、しかし全ての言語には統語論規則があり、語が句に、句が節に、節が文へというように規則的に組み上がって行く、ということを除けば、顕著な普遍事象を発見できていないのが実情である。

次にナイダの説を取り上げよう (ナイダ, 1973)。ナイダは厳密な翻訳の可能性に関して楽天的であったが、そのように楽天的であった背景には、ナイダ独自の言語観があるように思われる。ナイダは、あらゆる言語のあらゆる文は核文 (kernel) というものの組合せで構成されており、その核文は、いかなる言語においても事物語、行為語、抽象語、関係語の4種類に分類できる語の組合せであると考えていた。

この分析によれば、例えば「花子の結婚式に出席した太郎は、花子の美しさに見とれた。」という文には、「花子が結婚する」、「太郎が結婚式に出席した」、「花子は美しい」、「太郎は美しさに見とれた」という4つの核文が含まれている。また「花子が結婚する」は、事物語「花子」、関係語「が」、行為語「結婚する」によって、「太郎が結婚式に出席した」は事物語「太郎」および「結婚式」、関係語「が」および「に」、行為語「出席した」によって、「花子は美しい」は事物語「花子」、関係語「は」、抽象語「美しい」によって、「太郎は美しさに見とれた」は、事物語「太郎」および「美しさ」、関係語「は」および「に」、行為語「見とれた」によって構成されていることになる。

全ての言語でこのような分析が可能であるなら、その分析を足がかりにすれば、次の図のように、原語と訳語の間の距離を縮めることができるからである。



円で囲まれたものと、四角で囲まれたものはそれぞれ別の言語を表している。ここでは、原文はまず核文へと分解される。次に核文は事物語、行為語、抽象語、関係語のいずれかに分類される語の組合せとして分析される。この分析に基づいて、原語と訳語を対応付けていく。この際、事物語は事物語に、行為語は行為語にというように、語の種類を変えないように対応させる必要はない。なぜなら翻訳において重要なのは、形式的等価性ではなく動的等価性だからである。対応する訳語を選び出したら、それを核文へと組み立てる。原文の核文と、訳文の核文の間には、必ずしも対応関係がなくてもいいだろう。最後にいくつかの核文をあわせて訳文を完成させる、という具合である。ただし、ナイダの説に対しては、翻訳家は、実際に翻訳するときそんな過程を経ていないではないか、という批判も挙げられていることは付け加えておく。

1.6. 言語の翻訳可能性と言語の習得可能性

母語を習得できるのだから、外国語を習得することも可能であり、外国語習得が可能なことから、外国語を厳密に翻訳することも可能である、という考え方がある。しかし、この主張は端的に誤りである。外国語の習得は、外国語の厳密な翻訳よりも簡単だからである。このことは、ある程度英語に習熟している人の多くが、自分が英文を読んで理解したことを日本語に翻訳しようとするときに、困難を感じた経験を持つ、という事実のうちに実証されている。

外国語を習得するということは、冒頭の図で言えば自らが原語の読者 **R** になることである。言語を習得すれば、言語の形式（英語ならアルファベットなど）も習得されるため、形式が重要な意味を持つ詩であっても、ネイティブと同様に理解することもできる。また、

それぞれの表現の共示も同時に学んでいくため、文章の外示だけではなく、共示についても知ることができる。原著が原語の読者にもたらす反応と同じ反応を得るためには、原語を習得し、原著を読むのが最も近道なのである。

このことから、厳密な翻訳の可能性は、文化の収斂によってのみもたらされるのではないか、という意見が生じてくるかもしれない。言語の形式的特徴はさておいて、表現の共示は、その表現の文化の中での位置づけに影響されている。翻訳される言語の側の文化と、翻訳する側の言語の文化が似通っていればいるだけ、共示も翻訳しやすいことになる。実際、英語の文章をホピ語に翻訳するのはきわめて困難であろうが、フランス語に翻訳するのはきわめて容易である。日本語に翻訳する難しさはその中間であろう。そのようになるのは、文化的隔たりの大きさが異なっているからである。したがって、地球上の全ての文化が収斂し統一された文化圏ができれば、共示を含めた厳密な翻訳が可能になるのではないだろうか。

しかし、統一された文化圏が築かれるまでには、翻訳される側の言語も、翻訳する側の言語も、少なくとも表現の共示が大きく変貌してしまう。現時点では共示を含めた厳密な翻訳は不可能であり、それが可能になるためには、言語自体が変わらなければならないということを、このことは示しているのである。

逆に、外国語を翻訳し、それを人々が読むと、文化の収斂が進むだろう。日本は、古くは中国の書物を和訳して取り入れ、中国の文化に自らの文化を近づけていったという、また、明治維新时期には、欧米の書物を和訳して取り入れ、欧米の文化に自らの文化をすり合わせていったという歴史がある。

翻訳が文化を収斂させ文化の収斂が翻訳を可能にするというこの循環は、言語の変化をも視野に入れた、ダイナミックな文化論の基盤になるかもしれない。翻訳活動による言語の変化の過程は、鎖国経済にあった国が、突然鎖国を解いて外国との貿易を開始した際とたどる過程に類比的であると思う。江戸末期、鎖国中の日本国内では、金と銀の単位重量あたりの価格は4 : 1であった。それに対して、アメリカではこの比率が15 : 1であったため、明治維新时期に日本を訪れたアメリカ人は、持ち込んだ銀を日本で売り、金を買ってそれをアメリカで売って大儲けをしようとしたので、日本の経済は、銀の価値の暴落と金の価値の暴騰で一時的に混乱が生じたのであった。

ここで、アメリカ人との貿易は翻訳の流入、金が金であり銀が銀であることを外示、金と銀の交換比率を共示、金や銀の軽量単位を形式と対応付けてみよう。翻訳書の流入は、表現の形式や外示には影響しないが、共示を一時的に混乱に落とし入れることになる。しかし最終的には外示が一致するものは共示も一致するということで均衡を見出し、結果的に、翻訳される言語と翻訳する言語の共示は収斂することになるのである。頻繁な翻訳による文化の収斂という現象は、世界経済の出現による、商品間の単一の交換レートの出現に対応することになる。

2. 厳密な翻訳は1つだけ存在するのか？ ～翻訳の不確定性原理について～

2.1. 根源的翻訳

意味の研究に行動主義の考え方を導入したブルームフィールドは、言表の意味は「話し手がその言表を発する〈状況〉であり、また、その言表が聞き手から引き出す応答行動である」と言う（ムーナン, p.37 の引用を孫引き。引用元はブルームフィールド, 1962）意味を、観察不可能な心の状態によってではなく、観察可能な状況や物理的反応によって説明する試みは、外国語翻訳の可能性だけでなく、コミュニケーションの可能性、さらには子供が母国語を学習できる可能性を、経験論の側から下支えするものである。（ちなみに、これらの可能性を合理論の立場から支えているのは、1章で取り上げた普遍事象の存在である。）

ブルームフィールド自身は、自分の見解が、厳密な翻訳が不可能であることを証明してしまったと思っていたようである。そのように思った理由は、ある言表の意味を定めるためには、その言表を用いる発話を過去から未来に至るまで全て観察しなければならない、とブルームフィールドは考えたからである。だが、私が感じている〈この〉感情を言葉で表現することなどできようかというように、情意の私秘性を強調する主張、あるいは逆転スペクトルの懐疑などから、経験されているクオリアを他人に伝えることは不可能である、と結論する議論と比べると、ブルームフィールドの立場は、上述の可能性に関してははるかに寛容であると言えるだろう。なぜなら、人間の能力の限界によって、全ての行動を観察するのは不可能だとしても、観察数を増やしていけば徐々に意味を理解していくことができる、という活路が救い出されているからである。

クワインの議論は、ブルームフィールドと方向性を同じくしているが、ブルームフィールドのものよりもはるかに精密であり、深い真理を抉り出している。クワインが彼の著書『言葉と対象』で提起する場面は、仲介に立つような通訳者が存在せず、翻訳の助けになるような辞書も存在しない状況で、いかにして翻訳マニュアルを作ることができるか、というものである。このような状況を、クワインは**根源的翻訳 (radical translation)**と呼ぶ。文化間の交通が発達した現代では、もはやこのような状況は存在しないかもしれないが、例えば、これまで西洋文明との接触を断ってきた未開の部族に初めて文化人類学者が接触し、人々の言動を観察することを通して、未開の部族の言語（言語 X としよう）を文化人類学者の言語（日本語であるとしよう）に翻訳するマニュアルを作る過程を考えればよい。

文化人類学者は、日本語と言語 X の翻訳マニュアルを作るに際して、原住民の言動を頼りにするしかない。例えば、文化人類学者と原住民が居合わせた状況で、突然二人の前にウサギが飛び出し、原住民がウサギを指差して“Gavagai!”と言ったとすると、これは「ウサギ!」という意味の1語文なのではないかと推測することができるだろう。しかしもちろん、“Gavagai!”は、「気をつけろ!」とか「白だ!」という意味かもしれないから、この対応関係は仮説の域を越えない。確からしさを高めるためには、文化人類学者は目の前

にウサギがいる場で、“Gavagai?”と発音をまねて原住民に聞いてまわり、肯定的な返事が得られるかを調べなければならない。もちろんここでも、疑問文を作るためにはどうすればいいか、どういう表現が「はい、そうです」に相当する肯定的返答で、どういう表現が「いいえ、ちがいます」に相当する否定的返答であるかといったことも初めは分からないのだから、同時並行的に仮説を設定していかなければならない。ただ、主張文と同じ形の表現が疑問文としても使えるというのは、あらゆる言語に共通する語用論的な特徴であるように思われるし、原住民が何かを言ったときに文化人類学者がそれを復唱し、それに対して原住民から得られた返答は、「はい、そうです」の意味である可能性が高いから、この点に関しては調査の早期に対応を確定させることができるものとしておく。

文化人類学者は、原住民が何らかの文を話したらその発音を記憶し、さまざまな状況で複数の原住民に同じ文で質問をする。そして、原住民がどのような刺激にさらされているときに質問に肯定的に答え、どのような刺激にさらされているときに否定的に答えるかを、記録していったとしよう。(どれくらいの時間的範囲の刺激を記録すればよいか、という問題について、クワインは興味深い議論を展開しているが、ここでは割愛したい。)クワインは、ある文による質問に対し、肯定の返事が返ってくるときの刺激の集合をその文の肯定的刺激意味 (*affirmative stimulus meaning*)、逆に、否定の返事が返ってくるときの刺激の集合をその文の否定的刺激意味 (*negative stimulus meaning*) と呼んでいる。肯定的刺激意味と否定的刺激意味の順序対は、その文の**刺激意味 (stimulus meaning)** と呼ばれる (クワイン, p.50~51)。

この調査によって、言語Xの文にはいくつかの種類があることが判明する。“Gavagai?”などを含む少数の文は、原住民がさらされている刺激の違いによって、肯定否定が変化する。これらの文には、「痛い。」「赤い。」「かれの顔は汚い。」という意味に相当する言語 Xの文が含まれるだろう。クワインはこれらの文を場面文 (*occasion sentence*) と呼び、その中でも、特に刺激との対応付けが単純なものを観察文 (*observation sentence*) と呼んでいる。観察文の典型は「赤い。」「まぶしい。」「高い音が聞こえる。」などである。“Gavagai.”も刺激との対応関係は単純だと思われるかもしれないが、文化人類学者がいない時に、草むらにウサギが隠れるのを目撃した原住民は、後からやってきた文化人類学者の“Gavagai?”という質問に、ウサギの見えない草むら指差して肯定的に答えるだろう。場面文も大なり小なり、質問がなされる時点での刺激以外の要因に返答が影響されるのであり、そのような干渉が少ないものが観察文と呼ばれるのである。干渉の少なさは程度問題なので、ある場面文が観察文であるかどうかは程度問題である。したがって議論の分かりやすさのために、以後は“Gavagai.”も観察文だと見なすことにする。

文の中には、さまざまな場面で異なる原住民に繰り返し質問しても、刺激に関わらず一定の返答を得るものがある。これらの文は、定常文 (*standing sentence*) と呼ばれている。典型的な定常文は、原住民にとっての不変の真実や虚偽を表す文であるが、他にも「ムガシ (人名) には二人の子供がいる。」に相当する文も、長期間返答は一定であるから、定常

文に含めてよい。文の中には、聞く相手によって答えがまちまちだが、同じ人に聞くと答えが一定しているもの（例えば「あなたは独身だ。」に対応する言語 X の文など）や、聞く時間によって答が変わるが、同じ時間であれば誰に聞いても答えが一定しているもの（例えば「今日は元日だ。」に対応する言語 X の文など）もあるが、単純化のためにそれらは場面文の一種としてしまうことにする。

このような情報によって、①観察文の文単位での翻訳、②文修飾の真理関数の翻訳、③刺激分析的な文と刺激矛盾的な文の同定、④刺激同義的な言語 X の文と日本語の文のペアの同定が可能になる、とクワインは考える。

まず①についてであるが、観察文に対する翻訳は、刺激意味から確定することができるだろう。なぜなら、「赤い。」に相当する言語 X の文に対し、原住民は、赤いものが見えているときに限り肯定し、そうでない時は否定するので、原住民が何に反応して応答を変化させているかは明白だからである。

次に②についてであるが、「というわけではない」や、「かつ」など、文修飾の真理関数は同定可能であり、したがって翻訳可能である。というのも、付け足すと肯定的刺激意味と否定的刺激意味が逆転するような表現は、「～というわけではない」に翻訳できるし、任意の2つの文を表現 α でつないで作った文の肯定的刺激意味が、元の2つの文それぞれの肯定的刺激意味の積である場合は、表現 α は「かつ」に相当する真理関数であると分かるからである。

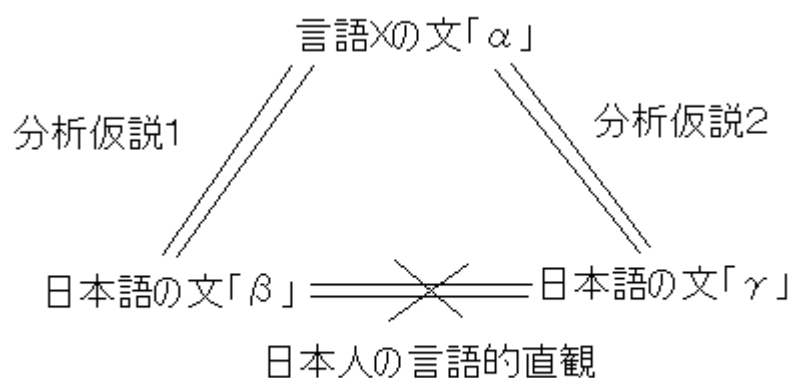
次に③についてであるが、刺激分析的な文というのは、否定的刺激意味が空集合であるような文のことであり、刺激矛盾的な文というのは、肯定的刺激意味が空集合であるような文のことである。どのような刺激の下で誰に聞いても肯定が返ってくる文が刺激分析的な文であり、どのような刺激の下で誰に聞いても否定が返ってくる文が刺激矛盾的な文なのであるから、これらが同定できるのは当たり前である。しかしながら、刺激分析的な文は分析的な文ではないし、刺激矛盾的な文は矛盾的な文ではない。例えば、「心臓を持つ動物は腎臓を持つ動物である。」（現在までのところ、心臓を持つ動物はかならず腎臓を持つことが経験的に確認されている。これは分析哲学において頻用される例文である。）に対応する言語 X の文は刺激分析的な文であるが、心臓を持つ動物が腎臓も持っているということは、たまたま成り立っているだけの総合的な事実であるから、これは分析的な文ではない。刺激矛盾的についても、同様の議論が可能である。

最後に④であるが、2つの文が刺激同義的であるというのは、2つの文の刺激意味が一致するということである。文化人類学者は、刺激意味を調査する際に、「同様の刺激に自分がさらされている時に、これこれの日本語の文で質問されたら領いたのだろうか？」と内省することで、言語 X の文と同じ刺激意味を持つ日本語の文を同定できるだろう。

しかし、刺激同義性は、われわれが直観的に理解している意味の同義性とは、似ても似つかない概念であることには注意しなければならない。分かりやすさのために日本語内での例を挙げるなら、「これは心臓を持つ動物である。」と「これは腎臓を持つ動物である。」は

刺激同義的な文である。「地球は丸い。」と「犬の中には黒い犬もいる。」も刺激同義的である（これらは両方とも刺激分析的な文である）。また、「1 + 1は3である。」と「すべてのウサギは黒い。」も刺激同義的である（これらは両方とも刺激矛盾的な文である）。したがって、言語 X の文 A と刺激同義的な日本語の文 B を見つけたからと言って、A を B に翻訳してしまうわけにはいかない。

クワインは、①②③④の範囲を超える翻訳は**分析仮説 (analytic hypotheses)** に頼らなければ不可能であるとする。分析仮説というのは、翻訳マニュアルと考えておけばよいだろう。つまり観察文以外の全て、要するに、語や定常文、観察文以外の場面文の翻訳は、分析仮説に依存しているというのである。この章の主題であるクワインの**翻訳の不確定性原理 (principle of indeterminacy of translation)** とは、①②③④という刺激意味のデータだけからでは、分析仮説が一意に定められないことを主張するものである。「ある言語を別の言語に翻訳するための手引きには、種々の異なる手引きが可能であり、いずれの手引きも言語性向全体とは両立しうるものの、それら手引きどうしは互いに両立しえないということがありうる。」とクワインは主張する（クワイン, p.42）。手引き (=分析仮説=翻訳マニュアル) 同士が両立しないとされるのは、「ある言語の翻訳文として、いかにゆるい意味でも互いに等値とは言えないような、他の言語をいくつか与える」からである（クワイン、同）。これは常識に反した驚くべき主張である。言われているのはつまり、下図のような状況が起こりうるということである。



言語 X の文「α」は、分析仮説1に基づいてこれを和訳すると日本語の文「β」となる。しかし、分析仮説1と同じくらい「言語性向全体と両立」する分析仮説2に基づいてこれを和訳すると、日本語の別の文「γ」なる。しかも、「β」と「γ」は日本語を母国語とする話者の言語的直観からして、全く違う意味になるというのである。もしこれが真実であるとすると、「同義性」の概念は致命的なダメージを負うことになりそうである。というのも、文の同義性の関係は推移律を満たさなければならないと考えられるが、βとαが同義

的であり、 α と γ が同義的であるにもかかわらず、 β と γ が同義的ではないのだとすると、これに対する反例となるからである。

翻訳は、原文の意味を保存したまま、それを訳文に移しかえる作業であるといわれるが、もし同義性の概念が推移律を満たさないのだとすると、この意味の概念が崩壊してしまうことになる。なぜなら、同義性の概念が推移律を満たさないと、同義的であるような文の集合を作ることができないからである。同種であるような生物の集合が作れなければ、犬や猫といった概念は崩壊してしまうだろう。同様に、同義的であるような文の集合が作れなければ、意味の概念は崩壊してしまうのである。クワインはしたがって、意味の問題は事実問題 (matters of fact) ではないとする、**意味の反実在論**に加担していることになる。

2.2. 翻訳の不確定性原理はいかにして論証されるか

なぜ、分析仮説は一意に決定しないとされるのだろうか。それは第1には、**刺激意味から得られる情報と、分析仮説が扱うもの**の間には大きなギャップが存在するからである。このギャップは、前節においても、刺激意味と意味、刺激同義性と同義性、刺激分析性と分析性、刺激矛盾性と矛盾性の間のギャップとして、伏線が張られていたものである。翻訳のために必要なのは後者なのに、経験的に得られるのは前者だけである。翻訳の不確定性原理の根拠となる第2のポイントは、クワイン自身が提唱者となったホーリズム (holism) の考え方である。ホーリズムは、当初科学哲学の文脈で提起されたものであり、それによると、「外的世界についてのわれわれの言明[命題]は、個々独立にではなく、一つの団体として、感覺的経験の裁きに直面する」のだという (クワイン, 1992)。長くなるが、クワインの文章を引用することにしよう。

科学全体は一つの力の場のようなものであり、その境界条件は経験にほかならない。周辺部における経験との衝突は、場の内部での再調整を引き起こす。これまでの言明のどれかに対して、われわれは真理値を再配分しなければならない。そして、言明相互の論理的関連ゆえに、ある言明の再評価は他の言明の再評価をもたらす。——論理法則は、それ自身、その体系におけるさらなる言明、場のさらなる要素にすぎない。それゆえ、一つの言明が再評価されるとき、それに伴って再評価される他の言明は、その言明と論理的に関連している他の言明でもよいが、その論理的関連そのものについての言明であってかまわない。場全体はその境界条件、すなわち経験によってはきわめて不十分にしか決定されておらず、それゆえ、衝突する経験が何か一つ生じたときに、どの言明を再評価するかについてはなお多くの選択が可能となる。いかなる特定の経験も場の内部にある特定の言明と結びついてはいない。それはただ、場全体の均衡という考慮において間接的にのみ、特定の言明と結びついている。

ある仮説を立てて実験を行ったところ、得られた結果は予想を裏切るものだったとしよ

う。このような場合、仮説が反証されたと考えるのが普通であるが、クワインはそこに「待った」をかけ、そのように考えなければならぬ必然性はないと主張する。なぜなら、仮説から予想を引き出すためには、仮説以外にも数多くの前提を必要としており、予想外の結果が得られたのは、それらの前提が誤っていたせいであるかもしれないからである。検証中の仮説を H 、それらの前提を $P_1, P_2, P_3 \dots P_n$ 、仮説と緒前提から得られる予想を E とすると、仮説と緒前提の連言は予想を導くので、

$$P_1 \wedge P_2 \wedge P_3 \wedge \dots \wedge P_n \wedge H \Rightarrow E$$

と書ける。ところが、実験結果から E は偽であることが分かった。したがって、背理法によって $P_1 \wedge P_2 \wedge P_3 \wedge \dots \wedge P_n \wedge H$ は偽であることが判明する。しかし、問題はこの先である、連言でつながった複合命題は、それを構成する命題の少なくともどれか1つが偽であれば偽となる。つまり、 $P_1 \wedge P_2 \wedge P_3 \wedge \dots \wedge P_n \wedge H$ が偽であることが分かっても、 H が偽であるとは限らず、 $P_1 \sim P_n$ のいずれかが偽であるゆえに、全体が偽となっている可能性があるのである。個々の仮説の真偽は、実験によっては決定できないというテーゼは、**デュエム＝クワインテーゼ**と呼ばれている。ホーリズムの考え方は、このデュエム＝クワインテーゼを徹底的に押し進めたところを開ける、哲学的眺望なのである。

科学理論は、さまざまな仮説の組合せから成り立っている。どれだけ確実に見えるものでも、例外なくすべてのものは仮説である、と言われることがあるが、クワインはこの点に関して徹底しており、数学や論理までもが仮説であると考えている。これらの仮説の全体からは、観察可能な予測が導き出せる。科学者はこの予測が正しいかどうかを実験で検証する。もし予測が外れていたらどうなるだろうか。デュエム＝クワインテーゼによれば、実験結果とのつじつまあわせのためには、科学理論に含まれるどの仮説を修正してもよい。極端な話、予測がうまくいかなかったのは用いた数学がいけなかったからであり、これまでの数学を捨てて新しい数学を作ろう、と結論付けることさえ可能なのである。この、修正の及ぶうる範囲の広大さゆえに、「衝突する経験が何か一つ生じたときに、どの言明を再評価するかについてはなお多くの選択が可能となる」のである。

ホーリズムの考え方は、あらゆる科学の基礎であるとされる物理学の理論が、複数ありうるということを示唆している。科学理論を決定するためのものであるはずの科学実験は、科学理論全体の真偽を知らせることはあっても、個々の仮説の真偽を知らせてはくれない。したがって私たちは、正しい科学理論に、真であると確かめられた仮説を積み上げていくようにして迫っていくことはできない。すると、実験結果を同じように説明することができるような、全く異なる仮説の組合せが排除できなくなるのである。このことは、**科学理論の決定不全性 (underdetermination)** と呼ばれている。ここで言われている決定不全性を、有限な数の実験データが理論を決定できない、という主張と混同してはならない。観察された実験データに加え、将来観察される実験データ、現実には観察されないが観察さ

れうる実験データを含めた無限のデータを考慮しても、なお複数の科学理論が生き残るといことが、ここでは主張されているのである。

翻訳の不確定性原理は、科学における上記の議論を、そっくりそのまま翻訳の問題に応用したものにはかならない。分析仮説は科学における科学理論と同じ位置にあり、刺激意味は科学における実験結果と同じ位置にある。すると、観察された刺激意味、将来観察される刺激意味、観察されないが観察されうる刺激意味を含めた無限のデータを考慮しても、なお複数の分析仮説が生き残り、分析仮説を一意に絞り込むことは不可能になるだろう。これは、クワインが「上からの論証 (pressing from above)」と呼ぶ、翻訳の不確定性の論証である。

次に、クワインが「下からの論証 (pressing from below)」と呼ぶ議論を取り上げることにしよう。クワインは、観察文は一意に翻訳できることを認めていた。すると、クワインに反対する者は、次のような反論を組み立てることが許されるのではないだろうか？観察文の中には、一語文も含まれている。(何が語であるかは、音声学的な特徴だけから確定できるだろう) それゆえ、一語文であるような観察文の翻訳から、分析仮説の助けを借りずとも、数多くの語の翻訳を確定することができる。いくつかの語の翻訳が確定できれば、その語を含む他の文を探し、その文の刺激意味と照らし合わせて、その文に含まれる他の語の翻訳も確定できるに違いない。そのような手続きを繰り返せば、全ての語の翻訳が確定し、したがって全ての文の翻訳も確定するだろう。

このような反論に水を差すのが、クワインの**指示の不可測性 (reference inscrutability)**の議論である。一語文の観察文“Gavagai!”を例にしよう。この文は、刺激同義性を介して日本語の一語文「うさぎ！」に翻訳することができる。しかしこのことからただちに、‘gavagai’ という語が日本語の「うさぎ」という語と同義であるとはいえない、とクワインは言うのである。なぜかといえば、‘gavagai’ が「うさぎ」ではなく、「ウサギ性」や、「うさぎ相」、「分離されていないウサギ部分」と同義であるとしても、刺激同義性の基準とは抵触しないからである。‘gavagai’ がこれらの日本語の単語のうちどれと同義であるのかは、「あそこに ‘gavagai’ は何匹いますか？」と原住民に質問し、返答を理解することができるならば確定できるだろう。(例えば、‘gavagai’ が「うさぎ」ではなく「ウサギ性」と同義的であるならば、目の前にうさぎが 2 匹いる時でも、「‘gavagai’ は 1 つだ。」と答えるので違いが分かる、というように。) しかし、このような高度なコミュニケーションは、分析仮説の助けを借りなければ実現できない。そして、「上からの論証」で論証されたように、分析仮説は一意に決定できないのである。

私には上記の議論は屁理屈にしか聞こえないのだが、クワインにあつてはともかくも、指示の不可測性の存在が、一語文の観察文の翻訳の確定から語の翻訳の確定への経路を遮断し、観察文以外での翻訳の不確定性を「確保」する役目を果たしているのである。

2.3. FAQs

哲学において提起されてきたテーゼの中でも、翻訳の不確定性原理ほど誤解と反論にさらされてきたテーゼは珍しいだろう。翻訳の不確定性原理は、それだけ各方面に波風を立てたのだとも言える。誤解とは、翻訳の不確定性原理は当たり前なのではないか、というものであり、批判とは、少し頭をひねれば、翻訳の不確定性原理はただちに矛盾を引き起こすのではないか、というものである。そこでこの節ではFAQとして、翻訳の不確定性原理に対するよくある誤解と、よくなされる反論について、いくつか取り上げることにする。これらは、ロバート・カークの著作に纏められていたものの一部を、ピックアップしたものである (Kirk, 1986)。

よくある誤解① 翻訳とは妥協の産物であり、翻訳は本質的に誤訳である。したがって意味の異なる翻訳が複数あっても仕方が無いだろう。これは数学では正答は1つしかないが誤答はたくさんある、ということと同じであるから、翻訳の不確定性原理は当たり前のことを言っている。答：クワインは厳密な翻訳において翻訳の不確定性が存在すると主張している。これは数学の比喩を再利用するなら、翻訳には正答が2つ以上あるという主張であり、当たり前な主張ではない。

よくある誤解② 有限な数の点を通る曲線は無数に引けるのと同じように、有限な数のデータは、理論を一意に決定できない。したがって、ロゼッタストーン上の有限の情報だけでは、ヒエログリフとギリシャ語の翻訳関係は1通りには決定できない。翻訳の不確定性とは、このことを言っているのである。答：翻訳の不確定性は無限のデータが得られたと仮定しても、なお存在するものである。したがって、上記の例は翻訳の不確定性の例ではない。たしかに、有限な能力しか持たない人間が、無限のデータを得ることは実際には不可能なので、実際には認識論的な理由からも翻訳は一意に決定できない。しかし、翻訳の不確定性は、このような認識論的限界を取り払ってもなお存在するものであり、それは翻訳の存在論的な不確定性と言えるだろう。

よくある誤解③ ある本が2人の翻訳者によって別々に翻訳される場合、完成した訳本は、その字面において異なっているだろう。翻訳の不確定性とはこのことを言っているのだから、当たり前の主張である。答：翻訳の字面が違うだけではなく、意味の上でも全く異なる2つの翻訳が、同時に正しい翻訳だとされうることを主張するのが、翻訳の不確定性原理である。常識的には、2つの翻訳が、字面だけではなく意味においても全く異なるとしたら、2つのうち少なくとも片方は誤訳であると見なされるだろう。翻訳の不確定性原理はこの常識に挑戦を挑む、きわめて非常識な主張である。

よくある誤解④ 詩や文学作品が2人の翻訳者によって別々に翻訳された場合、完成した翻訳が意味において異なり、しかも両方とも正しい翻訳とされることがある。翻訳の不確定性はこのようなことがあると主張するものだから、当たり前である。答：詩や文学作品がうまく1通りに翻訳できないとされるのは、言語の形式や共示をうまく訳出できないからである。外示のみに着目して翻訳する場合でも、2つの翻訳の外示が全く異なってい

ることがある、ということが翻訳の不確定性原理からは帰結するので、翻訳の不確定性原理は当たり前の主張ではない。

よくある誤解⑤ 例えば古代ギリシャの *aulos* という楽器は、フルートやオーボエやクラリネットに似ているが、どれとも同じではない。したがって、古代ギリシャ語の ‘*aulos*’ を翻訳するときには、「フルート」とも「オーボエ」とも「クラリネット」とも訳せる。これは翻訳の不確定性原理の例であり、このようなことは当たり前である。答：この場合「フルート」という訳も「オーボエ」という訳も、「クラリネット」という訳もおおよその訳に過ぎず、厳密な訳ではないから、翻訳の不確定性原理とは関係がない。

よくある反論① 翻訳の不確定性原理は、根源的翻訳の場合に限らず、例えば日本語と英語の間にも存在するはずである。英語と日本語の間は頻繁に翻訳がなされているし、英語を話せる日本人や、日本語を話せるアメリカ人はたくさんいる。それだけではなく、英語と日本語のバイリンガルもたくさんいる。しかし、同じ英文の正しい和訳が2通り存在して混乱が生じたという話は聞かない。日本語と英語の場合に限らず、言語間の翻訳活動が滞りないという事実は、翻訳の不確定性に対する明白な反例ではないか。答：トラブルが生じないのは、歴史的経緯のために、すべての人が同じ翻訳マニュアルを用いて言語の間を往来しているからである。もし他の人々とは異なる翻訳マニュアルを用いて翻訳する人がいたら、その人は周囲の人との不整合に困窮するため、直ちに他の人と同じ翻訳マニュアルを使うように改めるだろう。これは、パソコンのOSにおけるデ・ファクト・スタンダード現象と同じである。歴史的経緯のために、現実には皆ウィンドウズを使っているが、皆が使うOSが同じでさえあれば、それはウィンドウズでなくても良かっただろう。同じように、現実には皆同じ翻訳マニュアルを使っているのだが、皆が使う翻訳マニュアルが同じでさえあれば、それとは別の翻訳マニュアルを使うのでも良かっただろう。したがって、現実にトラブルが生じていないことは、他の翻訳マニュアルが存在しないということ立証するものではない。

よくある反論② 日本語と言語Xの間の、厳密な翻訳を与える2つの翻訳マニュアル α と β があるとしよう。日本人Aさんは、翻訳マニュアル α を用いて言語Xを話すCさんとコミュニケーションをしている。そして日本人Bさんは、翻訳マニュアル β を用いてCさんとコミュニケーションをしている。このような三角関係においては、AさんとBさんが会話をすると、Cさんのことに関して話に不整合が生じる。不整合が生じるということは、翻訳マニュアル α と β のうち、少なくとも一方は厳密な翻訳を与えるものではなかったということであり、これは当初の仮定と矛盾する。ゆえに、背理法によって当初の仮定は誤りであり、厳密な翻訳を与える翻訳マニュアルが2つ以上存在することはありえない。答：翻訳マニュアルは確かに、単独で使用されたときに生ずるトラブルには責任を負う。言い換えるならば、1つの翻訳マニュアルだけが使用されているときにコミュニケーションのトラブルが生じた場合は、その翻訳マニュアルは厳密な翻訳を与えなかったのだと結論できる。しかし、翻訳マニュアルは、他の翻訳マニュアルと併用されたときに生ずるトラブ

ルにまでは責任を負わない。したがって、上記の三角関係でコミュニケーションのトラブルが生じるという事実は、少なくとも一方の翻訳マニュアルは厳密な翻訳を与えていない、ということを含意しない。翻訳マニュアルは「まぜるな危険」なのである。

2.4. ホーリズムと言語の段階的学習可能性

カークは、彼の著書“Translation Determined”の中で、翻訳の不確定性原理への反論を試みている。彼の反論は背理法の形を取っており、①翻訳の不確定性原理が正しければ、ホモフォニック（同じ言語内）の場合でも翻訳の不確定性が生じる。②しかし、ホモフォニックな場合は翻訳の不確定性は生じないので、翻訳の不確定性原理は誤りであると議論を進めるものである。①にも問題があるのだが、ここでは、より重要な論点を含むと思われる②だけに注目することにしたい。

カークは②の論証のために、まだ英語を片言しか話せない2人の幼児を登場させ、まずは2人の間には翻訳の不確定性が存在しないことを論証する。次に、新しい語彙は既存の語彙を組み合わせて説明を与えることで学習できるように、幼少時2人のあいだに存在した翻訳の確定性は、言語能力発達の過程でも損なわれないことを証明しようとする。その詳細はここでは取り上げないことにしよう。カークの道筋は、カーク自身はそのことに気付いていないようだが、ホーリズムの考え方を言語に適応することに対する、マイケル・ダメットの根本的な疑義に連なるものである。

クワインのホーリズムは、「言語全体を知らなければ、いかなる文をも完全に理解することはできない」というダメットが**全体論的言語観**と呼ぶものを含意しているように思われる（丹治, 1996, p.276）が、全体論的言語観は、私たちが母国語や外国語をステップ・バイ・ステップで徐々に学習していくことができるという事実と抵触しているのではないだろうか、とダメットは考える。カークは逆に、私たちが積み木を積み重ねていくようにして言語を徐々に習得していけるという事実を考慮すれば、ホーリズムが導く決定不全を縮減することが可能である、と主張しているのである。

しかし、丹治がその著書で明快に述べているように、全体論的言語観と、言語の段階的学習可能性は両立する。言語全体を知らなければ、確かにいかなる文も**完全に**理解することはできないだろう。だが、言語の一部しか知らなくても、文の意味を**不完全に**理解することなら可能なのである。私たちは英語を学習する際、最初に“**This is a pen.**”が「これはペンです。」という意味であることを習う。私たちは軽率にも、このことを習うことによって、“**This is a pen.**”の意味を完全に理解したように思ってしまうが、それは全体論的言語観が拒否するところのものである。‘this’や‘is’や‘a’や‘pen’が他の文脈でどのように使われているかを知らなければ、“**This is a pen.**”の意味を完全に理解したことはならないだろう。だが私たちは“**This is a pen.**”の意味を、まずは不完全に理解したと言うことなら許されるのではないか。文法や、他の英文の学習を積み重ねていくことによって、当初不完全であった“**This is a pen.**”の意味の理解は、徐々に完全になっていくだ

ろう。(丹治, 1996)

カークは、全体論的言語観と、言語の段階的学習可能性が矛盾するという着想に動機付けられて議論を構成している。しかし、両者が矛盾しないことが分かったのだから、翻訳の不確定性原理を論破しているかに見えるカークの議論には、どこかに不備があるはずである。結局のところ、翻訳の不確定性原理は依然として生き残ったままになるのである。

2.5. 補論

① 1章の議論と2章の議論の関係

1章では、厳密な翻訳が可能であるかどうかを議論してきたが、2章では厳密な翻訳は複数あるのではないかという主張が提出された。両者の関係はどうなっているだろうか。私は、両者は互いに矛盾しない主張だと考えている。なぜなら、厳密な翻訳の不可能性の議論は、現在われわれが使っている分析仮説では外示を翻訳するのがせいぜいであり、言語の形式や共示を翻訳することは不可能であると主張しているだけであり、これは、現在われわれが使っている分析仮説以外の分析仮説が存在する可能性と、完全に両立するからである。現在われわれが使っているのは別の分析仮説をわれわれが使用していたとしても、同じように、言語の形式や共示は翻訳できないのではないかという議論がなされただろう。つまり、厳密な翻訳の不可能性は、厳密な翻訳の可能性の数だけ存在するのである。

② データを増やしたらどうか？

クワインは、根源的翻訳において用いるデータを、文の刺激意味に限っている。しかし、実際の根源的翻訳では、原住民の表情や、発話のイントネーション、ストレスの置き方、ボディランゲージ、生活スタイル、住む家の形や道具の種類なども翻訳の手がかりになるだろう。また、原住民は合理的な人間であり、彼らが文化人類学者に話しかけてくる際は、ウィルソンらが主張する関連性の原理に則って、話しかけてくるはずである(ウィルソン&スペルベル, 1993)。

例えば文化人類学者と原住民が2人にいるときに、文化人類学者のお腹がグー、と大きく鳴ったとしよう。原住民はその直後に、“Eva eva kunai.”と言い、走って自分の家の方に帰っていった。しばらくすると、彼は果物を持って戻ってきて、学者に果物を差し出しつつ、“Aku ngashi!”とニコリしながら言ったとする。このようなエピソードがあれば、文化人類学者は、刺激意味を探り出すなどと言った迂遠なことをしなくても、前者はおそらく「ここで待っている。」というような意味であり、後者はおそらく「うまいぞ、食べ。」というような意味だと分かるのではないか？

これらの指摘はもっともなことであり、刺激意味を調べて分析仮説を立てるなどというのは、およそ文化人類学のフィールドワークの実際など知らずに、アームチェアに腰掛けて思惟にふける哲学者の偏見に他ならない。だが、上記の情報を全て加味したとしても、

やはり翻訳の不確定性は生き残るように思われる。なぜなら、これらの情報を用いれば、観察文以外のいくつかの文が新たに翻訳できるようになるかもしれないということは認められても、依然として語のレベルでの翻訳は分析仮説に依存しており、分析仮説は無限のデータがあっても定まらないからである。無限のデータに新たなデータをいくら足しても、無限のデータであることには変わらず、焼け石に水である。

それでは、フィールドワークで得られるあらゆるデータに加え、原住民の脳の状態など、生理学的に得られるあらゆるデータを付け加えたらどうだろうか？私は、これらのデータを付け加えれば、翻訳が確定する可能性があると考えている。その論証は次のようになる。

クワインは、全ての刺激意味と整合する複数の分析仮説があることを主張する際、これらの分析仮説は、単純さ（simplicity）、もっともらしさ（plausibility）、実践性利便性（practical convenience）を無視した複雑怪奇な仮説であってもよい、と但し書きをつけている。そのような複雑怪奇な仮説も、論理的には許されるかもしれない。しかし、言語Xを話しているのは一人の人間である。複雑怪奇な分析仮説は、一般に複雑怪奇な思考を原住民に帰属させてしまうだろう。そして、そのような複雑怪奇な思考は、脳の物理的機能の限界を超えたものであり、脳がその思考を実装することは不可能であると判明するかもしれない。原住民の脳の処理能力の限界は、分析仮説に許容される複雑さに制約を課することになる。その制約を満たすことのできる分析仮説は、論理的に可能な分析仮説のうち高々1つしかない、という可能性は考えられるのではないだろうか。

この議論は、もちろん翻訳の不確定性の可能性を完全に否定し去るものではない。しかし、他の可能性が存在しないのはメタフィジカル（純論理的、形而上学的）な理由ではなく、フィジカル（物理学的、生理学的）な理由によってかもしれないという可能性を、机上の議論を好む哲学者は、常に念頭に置いておかなければならないだろう。

③翻訳の不確定性原理はそれほど奇妙か？

「経験主義の二つのドグマ」において、クワインは次のように述べている。

なるほど、記号を使用において定義するという考えは、ロックやヒュームにおける逐語的経験主義という不可能な説から一歩進み出たものと言える。——中略——だが、私はここで、たとえ言明を単位に考えたとしてもまだ細かく分けすぎている、と主張したい。経験的意味の単位は科学全体なのである。

この主張を翻訳の場面にも適用すると、ホーリズムの考え方においては、訳出の単位は、言明ではなく言語全体であるということになるだろう。いや、それには留まらない。デイヴィドソンが言うように、意味の研究は、信念の研究と切り離すことができない。したがって、翻訳マニュアルは、必然的に、原住民の慣習や信念体系についての仮説をも含んでいるのである。それゆえ翻訳マニュアルは、異なる言語を話す人間との付き合い方全般を

指南する、「付き合い方マニュアル」であると位置づける方が正確である。訳出の単位は言明でも言語全体でもなく、文化全体なのである。

翻訳の不確定性原理は、多数の両立しない付き合い方マニュアルが存在することを含意しているが、これは驚くにはあたらない。というのも、不確定性原理が言っているのは、それらの付き合い方マニュアルは、観察可能な原住民の振る舞いを説明するために弄する辻褃あわせの仕方が互いに異なっている、というだけのことだからである。複数の付き合い方マニュアルが両立しないとされるのは、異なる付き合い方マニュアルの間では、ある文に対する翻訳文が、明らかに異なる意味を持つことがあるからである。だが、訳出の単位は文化全体であり、「経験的意味の単位」も文化全体なのであるから、個々の文のレベルで翻訳や同義性を云々するのは、そもそもカテゴリー・ミステイクなのである。この主張の真に驚くべき点は、意味の単位が文化全体であるにもかかわらず、言語使用の単位は文（言明）であるようにしか見えない、という点である。そして、この緊張関係をどのように理解すればよいかという問題は、この小論で取り扱うことができる範囲をはるかに超えてしまっている。

参考文献

- ジョルジュ・ムーナン著、伊藤晃ほか訳、『翻訳の理論』、1980、朝日出版社
W. V. O. クワイン著、大出晃ほか訳、『ことばと対象』、1984、勁草書房
W. V. O. クワイン著、「経験主義の二つのドグマ」、『論理的観点から』、1992、勁草書房
ユージン・A. ナイダ、チャールズ・R. テイバー、ノア・S. ブラネン著、沢登春仁ほか訳『翻訳—理論と実際』、1973、研究社
ユージン・A. ナイダ著、成瀬武史訳、『翻訳学序説』、1972、開文社
柳父章著、『翻訳とは何か』、1976、法政大学出版局
丹治信春著、『言語と認識のダイナミズム』、1996、勁草書房
丹治信春著、『クワイン ホーリズムの哲学』、1997、講談社
B. L. ウォーフ著、池上嘉彦訳、『言語、思考、現実』、1993、講談社
服部裕幸著、『言語哲学入門』、2003、勁草書房
レナード・ブルームフィールド著、三宅鴻他訳、『言語』、1962、大修館書店
D. ウィルソン、D. スペルベル著、内田聖二ほか訳、『関連性理論：伝達と認知』、1993、研究社出版
山本巍ほか編、『哲学原典資料集』、1993、東京大学出版会
Robert Kirk, "Translation Determined," 1986, Clarendon Press. Oxford
Donald Davidson, 'Radical Interpretation,' in "Inquiries into Truth and Interpretation," 1984, New York: Oxford University Press